

## 第5編 まとめ

第2編では基本的な交通事故指標の整理として、一般的に用いられている事故率について、その特性、適用上の注意点を整理した。特に交通量が少ない区間で事故率を交通事故指標として採用することには十分な注意が必要であることを指摘した。その後事故率を用いて道路交通面に着目した交通事故分析の方法論として、車線数、沿道状況、道路種別が重要な着眼点であることを示した。次に当事者別、道路形状別、事故類型別、昼夜別、交差点規模別、道路線形別等に分析することにより、交通事故の基本的な特徴を整理した。最後に多変量解析により道路交通環境要因と事故密度との関係を総合的に分析することにより、説明力のある要因が自動車交通量、二輪車交通量等であることを示した。

第3編では事故類型別に事故発生要の道路構造・交通状況要因を整理した。分析方法として通常の集計表作成と併せて、データマイニングという全く新しい方法も採用した点が1つの特徴である。また分析結果は、各事故類型がどのような場所（幹線／非幹線、交差点／単路）で多く発生し、更にそれぞれの場所ではどのような道路構造、交通状況で多く発生しているのかをわかりやすく表現した。

第4編では道路をその特性で層別分類し、各層間で交通事故発生状況の比較を行った。交通安全施設の有無による層別分類を行った分析は、結果として、交通安全施設の設置効果を測定することになる。具体的には中央分離帯、右折レーン、歩道、道路照明の設置効果の算出を行うことができた。

さて、今後の展開であるが、これには幾つかの方向性が考えられる。例えば、より精緻な分析を求める方向性が考えられる。今回の報告でも若干扱っているが、デジタル道路地図（DRM）や道路管理データベース（MICH）を利用することにより、個々の事故発生地点の道路・交通状況がより正確に把握できるようになっている。今後も空間情報に関わる情報基盤の整備は着実に進展することが予想され、これらとの関連分析が期待できる。